

頭痛

なおいとしあき
猶惟寿昭

そのクライアントのことは、今考えても本当に驚きの連続でした。秘守義務がある立場の私としては本来口外してはいけないのですが、ひとつの症例として、私自身の問題に関することでもあるのでお話するのです。ですから、その辺のところはよくお含みくださいね。

カウンセラーの仕事に就いて、アメリカでの十五年の経験を含めると合計二十年になりますけど、こんなことは初めてだったので。離婚相談や、軽うつ病、拒食症から始まって、重症の PTSD（心的外傷後ストレス障害）まで、ありとあらゆるカウンセリング活動と治療を行ってきました。でも、このクライアントのケースは私にとって例外中の例外でした。

私の友人で大病院の脳神経科に勤める医師からの紹介状を持って訪れた三十五歳のその女性クライアント（仮に倉沢由美子さんと呼びしておきましょう）は、色白で目の大きなとてもチャーミングな肉中背の美女だったんです。どうみても精神的な悩みを抱えているような様子は見えませんでした。来年五十歳になる私も思わず惚れ惚れとしてしまいました。

カウンセリングの基本中の基本は、無条件にクライアントに対する肯定的関心を維持して、徹頭徹尾聞き役に徹すること、そのためにも楽な気持ちでクライアントが話したいことを自主的に話せるような雰囲気・環境を作ることですよね。貴方にこんなことを説明する必要はありませんでしたね。

私がソファアに座り、倉沢さんを私の座るソファアに直角におかれたカウチに腰をおろしてもらいました。品の良い薄いブルーのスーツの下には、大きなレースの襟が付いた真っ白なブラウスが私には眩しいくらいでした。

初めてのカウンセリングの緊張をほぐすために、少しでもお互いを知るために他愛ない話題を交わしながら、私は倉沢さんが持参した大病院からの紹介状に目を通していました。しばらくの間倉沢さんは

カウンセリング室内を爽やかな目で見回していました。そして、私に向って切り出しました。

「高宮先生は、梅津先生とはお親しいんですか？」。梅津というのは大学時代の同級生ですから、ニッコリ笑って合槌を打ちました。すると倉沢さんは、言います。

「でも先生の方が梅津先生よりずっとお若く見えますわ。それにともハンサムでいらっしやいますわ。このお部屋もとても落ち着いて静かなんですね」

私は微笑みながら無言でお礼の会釈をして、倉沢さんの次の言葉を待ちます。

「半年ほど前からときどき激しい頭痛に悩まされることがあって、大学のペイン・クリニック、それに内科や脳外科で検査をしていたんですが、特に悪いところは見付からずに、最近梅津先生に診ていただきました。」

その梅津先生が、カウンセリングにしばらく通われてはいかがですかと仰ったんです。優秀なカウンセラーを紹介しようということ、高宮先生のところに伺うことに……」

「ええ、梅津先生からの紹介状にもそのことは書いてありますし、電話でも先生から大体の事情はお聞きしています。何でも相談するといふ軽い気持ちで話してください。」

もういろいろとお聞きになつておられると思いますが、頭痛はありふれた症状で、日本人の三、四人に一人といわれるほど多くの頭痛持ちがいます。中には危険な病気の徴候といわれるものもありますが、貴女の場合はそのような所見は見当たらないと梅津先生も電話で説明してくれました。

心配ありませんから、何でも話してみてください」

「でも先生、何を相談したらいいんでしょうか？ 時々起る頭痛の原因は大学病院でも分からなかったんですけど。カウンセリングってどんなことをするんですか？」

「カウンセリングというのはアメリカではごく普通の診療なのです。私がアメリカでカウンセラーをしていたとき、私のクライアント、つまり相談に来られるお客さんの相談のうち三分の一はマリッジ・カウンセリングでした。もちろん、うつ病などの神経症、拒食症など多くの相談と治療をしてきました。」

人にはいろいろな悩みあります。その悩みを内に秘めておくと貴女のように激しい頭痛に襲われたり、場合によっては精神を病んでしまうことがあるんです。ですから他人に言い難い悩みがあったら、何でもいいですから私に話してみてください」

「先生、それってカソリック教会で古くからおこなわれてきた懺悔の告白みたいですね。するとこのお部屋は告解室で先生はカトリックの偉いお坊さんということになりますね」

このクライアントは大人しそうな顔と容姿に似合わずなかなかの理屈屋さんだぞ、先行き閉口するなと私は思ったものです。梅津医師からの電話で知らされていたのですが、ギリシヤに留学経験がある深窓のお嬢さん育ちでもありました。

「倉沢さん、私は偉いお坊さんなんかではありませんから秘跡を行うことはできません。倉沢さんが告白するような罪を過去に犯したともおもっていません。でも、貴女の良き相談相手にはなれると思います」

私は、クライアントの思わぬ先制攻撃に、本来の自制心ある傾聴の態度を失いかけていることに心の中で苦虫をつぶしたような気分になりました。それでも表面的には静かな微笑みを崩さずにクライアントの次の言葉を待ちました。

数十秒が、クライアントの倉沢さんにとってはとても長い間に感じられたのかもしれませんが。沈黙に耐えられなくなったように、モナリザのような微笑を少し崩して言いました。

「先生、私には何の秘密もありませんですよ。結婚も五年前にお互いの合意の上に解消しました。子供はいませんでしたし、お互いにお金に困るようなことも全然ありませんでした。今も特に悩みはありません。仕事もまあまあ順調です。ただ、……」

私は突然口を閉じた倉沢さんに質問することはしません。ここは倉沢さんと私の、クライアントとカウンセラーの勝負どころなのです。

倉沢さんは私の反応を待っているようでした。暫くして私は沈黙の中で立ち上がって部屋の隅にある冷蔵庫から市販の瓶入りの水をグラスに注いで差し出しました。

倉沢さんは軽く会釈をしてグラスを両手に受け取ると、じつとグラスの中の水を見詰めました。やがて、グラスを口に持っていくことなく傍らのテーブルの上に置くと口を開きました。

「先生、私が激しい頭痛に悩むようになったのは、昨年春ごろからなんです。初めて頭が割れそうな頭痛が襲ったときは、朝起きて洗面を済ませ、お化粧をしようと鏡台の前に座ったときです。

痛みはすぐに治まったんですが、翌々日の朝にその痛みが再び襲って来たときには、大声で叫びたいほどでした。最初のときのようにすぐに痛みは消えずに、わたしはベッドに横になって頭を抱えていました」

倉沢さんは、そのときのことを思い浮かべるように空中に目を留め、一瞬悲しそうな顔をしました。

「そのときも十分ほど経つと、何もなかったように頭はすつきりとして爽やかになりました。今度痛みが起こつたらお医者様に診ていただくと思いつながら、いつも通りの生活を続けました。明くる日からいつ頭痛が再発するかと心配しましたが、不思議なことに半月以上もその痛みからは解放されていました」。こう言うと私から顔をそむけて窓の外に何かを探るように眺めていました。

私はクライアントが思い出したくない苦しい出来事を一気に話させることは却つて事態を悪くすると考え、話題を変えてみました。

「貴女はギリシヤに留学されていたんですね。とてもいい経験をされましたね。楽しい思い出がたくさんあるのでは？ ギリシヤ神話は古事記や日本書紀に語られる神話と似たところがあります。ギリシヤ人も日本人と気心が通じるようなことがあるんじゃないですか？」

倉沢さんは私の言葉に目を輝かせるようにして反応しました。

「先生もそう思われますか？ 一見すると西洋的精神の神髄であるギリシヤ神話と東洋の片隅の小さな国日本の神代の話では共通点はまるでないように思う人が多いんですが、そんなことはないんですよね。

私、ギリシヤに行つて日本の古代文化を見直したことがたくさんあるんですよ」

ギリシヤの古典文学と哲学に関する豊富な知識と思い入れが垣間見られるような話に、私の倉沢由美子さんというクライアントに対する興味はますます大きく膨らんでいきました。

こうして最初のセッションは無事に過ぎたのです。特に精神的ストレスに苛まれているような気配は私にはまったく見受けられませんでした。私はむしろ魅力的な倉沢さんとの知的会話を今後も楽しみたい

とさえ感じていました。

梅津医師との電話で、日によって患者の気分と態度がまるで違うことがあるから驚かないようにと示唆されていたことを思い出しましたが、一週間後の第二回目のセッションを警戒と期待の混じったような気持ちで待ちました。

この間、私は離婚の危機に悩むクライアント夫婦双方に対して別々にカウンセリングのセッションを持つたり、不眠で悩む人の相談を受けたり、酒乱の父親から心身への虐待を受けた中年女性の来談治療の他に、臨床心理学会主催の研究会に出席したりしました。一度相談を受けると、ふつうはそのフォローアップを含めて、同じクライアントに対して数週間、中には数か月以上もカウンセリングを行う必要があるので、最近の日本でもこの仕事は結構忙しくなっていますね。

近年、日本でも心療内科という看板を掲げて診療所を開設しているカウンセラーも多く見かけるようになりました。でも、心の病気とか精神の異常を治療するということを暗示することは患者に不安を抱かせることもあります。私はアメリカ流に「高宮カウンセリング・クリニック」という名前でのこの高層ビルの中に診療所を開いたのです。そうです、今から五年ちよつと前です。

私自身が三年前に離婚したことは以前に話しましたよね。クライアントの一人と私の間を疑っていた妻が強度の心身症に罹っていたことに私自身が気付かなくて、長い間自分自身を責めましたし苦しみもしました。まさかそのことで私自身が心療内科に相談をするほどのことには至りませんでしたけどね。

誤解しないでくださいよね、私にはそのクライアントとは何も疾しいことはなかったのですから。

今もそうですが、当時受付と医療事務を兼ねて一人の女性スタッフを雇っていました。忙しいときや、その女性が休んだ時には家内がクリニックに来て仕事を手伝ってくれていました。家内がここに来なければならぬような状況は、月に二、三度あるかないか程度でした。

ところが、あるときから、突然週に一度、ある若い女性クライアントの来談の日に限って必ず来るようになったのです。

そのころ、私は母校の医学部で週に二日夕方からカウンセリング治療の講義をする依頼を受けていました。講義のある日はクリニックの

仕事を午後早めに切り上げて大学に出掛け、帰りには昔の仲間や聴講生たちと夜の巷に出て深夜に帰宅することもありました。アメリカでは仕事を離れれば何事も夫婦同伴で過ごすのが当たり前でしたから、アメリカ生まれの妻は、若いそのクライアントに対する私の親身な態度と、同僚や友人達との夜の付き合いとを結びつけて考えてしまったようです。

妻こそが私というカウンセラーを一番必要としていたときに、それに気が付かなかったというのが私達夫婦の離婚に至った真相なのです。後の祭りですが。

ところで、倉沢由美子さんの第二回目のセッションのことです。

その日最後のクライアントの受付を済ますとすぐに帰ることになっていた受付と事務をお願いしている中年女性が、やきもきしながら落ち着かない様子で倉沢さんの来院を待っていました。お蔭で私の落ち着きのなさは受付の女性には見破られませんでした。

そうなのです。私も倉沢由美子さんのことは、全く別の理由で受付の女性以上に心待ちにしていたのです。

倉沢さんは、午後四時の予約に二十分も遅刻して来ました。受付の女性は手続きを済ますと、私に会釈をして、「先生、一応クリニックのドアは外から鍵を閉めておきますね。お先に失礼します」と言ってお出て行きました。

倉沢さんは、カウンセリング室に入るや否や、私の顔を見るなり急に泣き出してしまいました。

「先生、ごめんなさい。午前中には仕事を終えていったん家に戻ってから伺うつもりになっていたんですけど。家の片付けをしていて先生とのお約束の時間に遅れてしまいました」

前回来た時には落ち着いた色合いのスーツに身を包んでいたのに、このときには派手なピンク色のワンピースを着ていました。体にぴつたりした服が妙に艶めかしくて、私はこのクライアントをまともな正面から凝視できないでいました。ワンピースの丈も挑発的な膝上二十センチもあるうかと思われます。先週のゆったりした純白のブラウスの時とは違って、襟ぐりの広く開いたワンピースのすぐ下には、半分見える胸の膨らみが誇らしげな存在感で独身の中年男性の私に迫ってくるのです。

遅刻したくらいで泣き出されては困ってしまいますよ。それに相手はとびきりの美人ときているのです。容姿といい教養の深さといい私の大好きなタイプなのです。大きな目から涙が流れ落ちて来るのを黙って見ているわけにはいきません。早速ポケットからハンカチを出して、「大丈夫ですよ」と優しく言いながら手渡しました。なぜか倉沢さん、この日は異常に感情が昂ぶっているようでした。

「倉沢さん、もしよろしかったらそのソファで少し休まれたらいかがですか。大急ぎでここに来られたんですね。お茶かお水を差し上げましょうか？」

こう言うと安心したように腰を下ろして、

「すみません、冷たいお水を頂けませんでしょうか？」と私を上目遣いに見上げてモナリザ・スマイルをして見せるのです。

落ち着いた頃合いを見計らって、私から切り出しました。

「最近頭痛の具合はどうですか？ 頻度はどの程度なのですか？」

何を言われたのか分からないような顔を一瞬見せてからクライアントは話し出しました。

「昨日の朝、いつもより一時間も早い六時ごろに目が覚めて、おトイレから戻ってベッドに横になろうとした途端に来たんです。頭が割れるような痛さなんです。実はちょうど生理中ですので、その痛みも下腹部にあつて、もう死にたいほどでした。頭痛の方はすぐに治まったので、いつも通り仕事には無事に出掛けることができました。

近頃は、多いときには一日に二、三度、少ないときは一週間に一度くらいの頻度で起こります。その痛みの強さは毎回同じではありませんが、偶には我慢の限界に近いと感じられることもあるんですよ。でも、長くても十五分以上続くことはありません。このごろは、いつ来るか、いつ来るかと、それが心配で人と会うのも怖いくらいです。

先生、お願いです。何とかしてください。病院でお薬の処方箋を頼んだこともありましたが、単なる頭痛剤では痛みの発生を止めることはできないし、出ても長期間持続するわけではない原因不明の痛みに対しては鎮静剤の服用は害こそあっても効果はないだろうとお医者様に言われています」。そう言ってまた涙を流しそうな悲しげな顔をして私を見詰めるのです。

私はクライアントが口にするのを避けているかも知れない悩みを探

らなければなりません。思い切って尋ねてみました。

「最初にここに来られたときに、貴女は『何も秘密はない。何も悩みがない』と言われましたよね。その後で、『ただ……』と何か言い掛けて話を止めてしまわれました。どんなに小さな悩みでも私に打ち明けてくれませんか？

ご承知の通り、私はカトリックの告解師ではありませんから、それによってあの世における幸せを約束できませんけど、貴女には良いアドバイスができるかも知れません。もちろん無理にとは申しません」
私がクライアントにこのような積極的なアプローチをすることはあまりありませんが、倉沢さんの場合は私を心から信じてくれていると思っただけです。

倉沢さんは、大きな目でじつと私を見詰め黙っていました。またしても、カウンセラーとクライアントの真剣勝負です。数分の時間が過ぎ、今度は私が先に口を切りました。

「倉沢さん、実は私も三年前に妻と別れたんです。私達には子供が恵まれませんでした。妻の悩みに気付かなかった私は自分を長い間苛みました。あのとき、誰かに相談できたらどんなに助かったらうかと、今でも悔やまれます」。こう言って目の前のつぶらな瞳をじつと覗き込みました。二つの大きな瞳の奥に何が隠されているかを探るように。

私のチャームिंगなクライアントは何かを口籠るようにモナリザの微笑の唇の端をかすかに動かしました。でも、口は開けませんでした。明らかに今日の倉沢さんは一週間前の倉沢さんではありません。同じなのは神秘的な微笑みと大きな目だけです。

暫くして突然倉沢さんの形相が変わったと思う間もなくソファアの上に突っ伏しました。両手はこめかみの辺りを強く抑えています。痛みを堪えるようなかすかな嗚咽のような声が聞こえてきます。

私は慌てて、「倉沢さん、靴のままでもいいですから少しソファアで体を寝かせたらどうでしょう」と言って両足のふくらはぎの辺りを持って下半身をソファアに持ち上げました。ハイヒールが両方とも脱げて床に落ちました。ワンピースの裾がまくれ上がり太腿の半分が見えてしまいました。倉沢さんは片手で裾を下に下げようとしながらも、もう一方の手は顔に覆ったままです。私は上着を脱ぐと倉沢さんの膝から腰のあたりに掛けて差し上げました。

倉沢さんはもう泣いてはいません。痛みも治まったのでしょうか、

息遣いも静かになっています。顔は片手で覆いながらソファアの背に押し付けるように捻じ曲げていましたが、首から下が大きく開けられたワンピースのネック・ラインは静かな呼吸に合わせてゆっくり上下に動いています。

「私はこの部屋を出て受付ホールにいますから、気分がよくなったら声を掛けてください。この部屋のドアは開けておきます」と言って、部屋を出ました。

私は少し不安になりました。一五分ほど経っても隣室の倉沢由美子さんからは何の反応もないのですからね。部屋に入るとソファアに膝を揃えてまっすぐ前を見詰めて座っています。

「気分はいかがですか？ 生理中と仰ってましたね。多くの女性が生理中に頭痛を経験すると言います。心配ないですよ。今日はカウンセリングを中止しましょう。また日を改めて来てください。今日のカウンセリングの費用は受付も帰ってしまったし、忘れてください」

「先生、ご迷惑をおかけしました。でも、もう少しここに居させていただいてもよろしいですか？」と、膝上のワンピースの裾を両手で下に伸ばすような仕草をしながら言うのです。私の背広の上着は傍らにきちんと畳んで置かれていました。

「さつきは、いつもの頭痛の所為ではないんです。先生の眼を見詰めている内に思い出したんです。別れた主人と結婚する前にお付き合いをしていた人がいました。先生の目がその人の眼と同じ深い哀愁を帯びていることに気が付いたんです」。倉沢さんは遠い昔に戻って行くようにじつと私の眼を見続けました。

「その人とは、敢えて口に出して確認するようなことはしませんでしたが、一生離れることはないだろうと感じていました。もちろんあの人も同じ思いだと信じていました。ある日私とその人のアパートを不意に訪れたとき、その人が私よりもずっと年上の魅力的な女性と親しげにしているところを見てしまっただけです」。

その人の私を見詰めた悲しそうな顔と恐ろしいほどの苦痛と悲哀に沈んだ眼の色は今でも忘れられません。先生の眼はその時のあの人の眼を思い起こさせるんです」

私は急に頭の両側面から目に見えない力で締め付けられるような鈍

痛を感じました。思わず片手を額に、もう一方の手をカウチの背もたれに着いて床に膝を落としてしまいました。

倉沢さんは私に構わず、自分の姿勢を変えることなく言葉を続けました。

「私は雷に打たれたような激しい感情に襲われ、家に帰って泣きました。生まれて初めて味合う挫折感でした。私は二度とその人に会うことは止めようと心に決めました。実際、その時がその人の生きている姿を見た最期でした。三日後にその人が自殺したことを知らされたんです。

詳しい事情を今言うことはできませんが、私は結果的にその人を殺してしまったのかもしれないとずっと思うようになりました」

そして静かに立ち上がると、私の傍に来て私の片腕をつかんでカウチに座らせました。そのころには私の不思議な頭痛はすっかり消えていました。倉沢さんの顔にも神秘的な優しい微笑みが戻っていました。

倉沢さんは立ったまま、座っている私の額にそつと唇を当てて、

「先生、今日はありがとうございます。今度は来週の金曜日の四時にお願います。明日、受付の方にお電話して予約の確認はしておきます」と言って受付ホールの方に行こうとしました。私は思わず倉沢さんの手をつかんで私の胸に抱き寄せようと思いました。ところが、思った以上の強い力でそれに抗うように言うのです。

「先生、いけませんわ。そんなことをしたらカウンセリングはできなくなりますわ。私はまだ先生のカウンセリングが終わっていないんですからね。というよりまだ始まっていませんですわよね」

私はそのモナリザの微笑みに対して成す術もありませんでした。

明くる日からの一週間がとても長く感じられましたが、カウンセリングの予約もほぼ一杯に入っていましたし、週末にかけての学会出張もあつて結構忙しかったのです。ただ、あれ以来ときどき瞬間的な頭痛を何度か感じて不思議な気分でもございました。告解師に懺悔しなければならぬような小さな罪の所為でしょうか？

そして金曜日、クライアント倉沢さんとの三回目のセッションが始まりました。受付の女性に促されて入ってきた倉沢さんは真白いスーツ姿でした。受付の女性はカウンセリング室のドアを閉める前に、前回の派手なワンピースの出で立ちとはまるで別人のような倉沢さんの

真っ白なスーツの後ろ姿を訝しげに見ていました。私はというと、白いワイシャツの上にブルーのカーディガンを羽織ってリラックスした格好でいました。

「先生、この前お会いしてから十日も経ちますが、一度も頭痛が起っていないんです。先週の週末をゆっくり過ごした所為でしょうか、今週はとても気分よく毎日がウキウキするようなんです。陽気もいいですからね」

「それは良かったですね。梅津先生とも電話で話したのですけど、倉沢さんの場合は、頭痛が起ることをむしろご自分で期待しているような節がありますね。もうカウンセリングの必要もないかも知れませんが。心も体も健康そのものですよ。むしろ私より健全な精神の持ち主です」と言つてにっこりして見せました。そう、作り笑いを無理にしたという顔の表情だったのでしょね。

倉沢さんは一瞬私の顔を覗き込んで、

「先生、お加減でも悪いんですか？ 先生の魅力的な優しい笑顔が今日はどこかに隠れておしまいのようですよ」と言うのです。

「倉沢さんの清楚で真っ白なスーツが眩しいのですよ、きつと。本当に今日の倉沢さんはおきれいでいらっしやいますよ。見る方の頭がくらくらしそうですよ」。私はこう言いながら、実際にこめかみの両側から頭を挟みつぶされるような鈍い痛みを感じました。

「先生、お水でもお飲みになられますか？ この前先生が私にしてくださいましたように、冷蔵庫のペット・ボトルからお水を入れてきて差し上げます。先生はじつとそのカウチに座っていてください。そう、じつとしていてください」。こう言つて私の肩に手を軽く触つてから冷蔵庫の方に歩いて行きました。すると私の頭痛は耐えられないほど激しくなりましたが、倉沢さんがコップを差し出すときの顔を見上げると、一瞬の内に痛みは引いて行つてしまいました。

「先生、最初にその激しい頭痛に襲われたのはいつだったんですか？ 何かのきっかけがあったんですか？」

私の目の前のソファーに座った倉沢さんのその言葉を聞きながら私は気を失いそうになりました。

今、私は本心から告白します。ええ、分かっています。貴方がキリスト教の告解師ではないことを。貴方にこの話を告白することで私の

罪が消えないことも私は知っています。でも、心の安らぎは得られるに違いありません。

私のクライアントだった倉沢由美子さんを、私はあの晩犯してしまつたのです。挑発したのは倉沢さんの方だと今でも固く信じています。どうやって犯したかですって？ それは言えません。私も覚えていないからです。だって、私はあの晩家の近くの小料理屋に寄つて、珍しく自分の飲める限度を超えてお酒を飲んだのです。そして、痛みで割れるような頭を抱えて家に戻つたら、倉沢さんが寝室で私を待っていました。

私は無我夢中で嫌がる倉沢さんを何度も何度も犯してしまつたらしいのです。純白のスーツを体から剥ぎ取るときの感触は、あれから半年経つた今でもまだこの両手に残っているような気がします。そうすることによつてのみ、死ぬ程辛い頭痛から解放される方法は他にないと思つたからです。翌朝目が覚めたら私はびっしょり濡れた布団の上に裸で横たわっていました。

倉沢さんの痕跡はどこにもありませんでした。どうして倉沢さんが私の家にいたのかも全く理解できませんでした。

あれから倉沢さんはクリニックに戻ってきてはくれません。倉沢さんの頭痛がなくなつてカウンセリングの必要はなくなつたわけですし、私の心の中を覗いてしまつたのですから当然といえは当然なのです。その代わり、今こうして私が貴方のカウンセリングを受けているのです。

本文文字数（10,351文字#26ページ）